

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2011 ～ 2013

課題番号：22320039

研究課題名（和文） 近代日本工芸、デザイン史基礎資料の総合的調査研究

研究課題名（英文） The Synthetic Research on the Fundamental Materials in the fields of Kogei and Design.

研究代表者

森 仁史（MORI HITOSHI）

金沢美術工芸大学・大学院・教授

研究者番号：80552992

研究成果の概要（和文）：

日本の工芸においては長い伝統のある習慣や手法が継承され、デザインにおいては技術や手法の変化が激しすぎるため、分類や概念規定が現状に追いつかない状態にある。こうしたばらつきのあるデータを検索するため、標準データモデルを作成し、これにマッピングすることによって、包括的な検索を可能とした。しかし、日本の「美術」の作品記述が依然として西欧由来であることは大きな障害であり、抜本的な再検討を要することを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Difficulties of study on Kogei are originated from many habits and historical background, one on Design from rapidly changing situation and trends. So we expected to make a solution for these circumstances by using proper means by digital technology, and then settle up the data base system that is useful for the researchers in these fields. This should be a standard model for discription of Kogei and Design works in Japan. After collecting data from separated instituions we did mapping the original data on the standard model of description for different kinds of materials--art works, books, documents and so on-- on Kogei and Design. These fields are attractive for the new point of view on the history of art in the Modern times in Japan. Because Japan imported the concept of arts from the West after the Meiji Restratriation, brought a great change in the traditional style of culture. The system of art we should examine on the means of discriptions of art works. For this we will test some aspects in this data base system. Because the way of description for Western paintings or sculpture is not adequete for Japanese works of arts.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
22 年度	2,600,000	780,000	3,380,000
23 年度	6,000,000	1,800,000	7,800,000
24 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
年度			
総計	10,400,000	3,120,000	13,520,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学、芸術史、・芸術一般

キーワード：美術館・博物館学、データベース、工芸史、デザイン史

## 1. 研究開始当初の背景

すでにヨーロッパにおいて進められているヨーロッパアーナやダブリンコアという先行データベース検索システムが存在する。ここで採用されている検索手法と各項目についての定義は異なる分野にまたがる複数のシステムを連携させるための一手法としては有用である。しかし、本研究で対象としている日本の工芸のデータベースの基盤部分とすることはできない。また、西欧の図書や美術作品の記述も、これとは異なる文化体系から生まれた文化財である日本の工芸に適用することはできない。

例えば、東洋の絵画における作品形態や附属品の重要性を考えれば理解できることである。しかし、日本の美術館の多くは1970年代に建設された公共美術館であり、この時点までの美術研究や地域の美術的関心の在り方を反映するのは当然である。また、殆どの美術館が新規に建設され、その時点で作品収集を開始したのであれば、そこにもこれらの要素が反映されることになる。この結果、多くの美術館が西洋的な美術規範に従って、収蔵品管理を始めたとしても不思議はない。反対に、戦前の個人コレクションを核とした古美術を扱う美術館はこうした動向とは離れて独自の手法をとっていった。

こうした日本における「美術」の独特な形態と概念についてわれわれが意識的になったのは1980年代末であり、バブル経済崩壊後、すなわち戦後モダニズムの成長幻想とヨーロッパ追従の破産を目にしてからのことであった。これには、東西対立の崩壊や反グローバル化という世界的な動向が反映されていることも事実である。このなかから、日本におけるかつての後進性の表象としての工芸概念や領域がもっとも重要な主題として浮かび上がってきたのであり、本研究の出現もこの一端に連なるものと考えたい。

## 2. 研究の目的

作品研究にとって、対象分野の作品の基本情報の収集はもっとも基本的であるとともに、緻密な研究水準を支える上で欠かすことのできない条件である。ところが、これまで美術館などが研究、公開を進めてきた絵画、彫刻以外の分野、すなわち工芸、デザインについてとみに関心が広がってきている現状があるにもかかわらず、これらの分野では作品記録については標準化された書式、手法が確立されてこなかった。この現状を踏まえて、研究要請に応え得るように、個別に蓄積されているデータを調査・集約し、適切な処理を施して、これらを縦断検索できるシステムを構

築し、将来の調査研究に寄与したい。と同時に、金沢の地域性を踏まえて、金沢美術工芸大学の研究主体として工芸分野に特化した特性を形成する礎としたい。

## 3. 研究の方法

### ・データの収集

これまで単独施設での所蔵品検索はいくらかも実例がある。しかし、幾つも所蔵機関をまたいでそれらのデータを検索する例は少ない。本研究にとっては実際のデータを用いて検索するときには生ずる障害や問題を点検することが目的なので、具体的なデータ収集は欠かすことができない。このため、本研究の趣旨に賛同頂ける機関からデータ提供をお願いした。ただ、本研究のために新たにデータ作成をお願いするのは負担が大きいため、既存のデータを提供頂くことにした。この方がデータ相互間のばらつきや不整合を検索システムとしてどのように解決できるかの実験になるからでもある。この結果、最終年度までに12機関から約26,000件のデータを提供頂くことができた。このことは本研究の対象領域への関心と成果に期待が寄せられていることを実感した。

### ・標準データモデルの作成

集まった各機関のデータを検討した結果、採取項目や記述に予想以上にばらつきがあることが判明した。このままでは一つの検索項目が検索対象とする項目としてそれぞれに異なることになってしまう。また、ユーザーが期待する検索項目を検討しつつ、あるべき採録項目とその記述を想定しなければならぬことも明らかとなった。なぜなら、本データベースで表示されるいずれかの項目が確定していないと、収集されたデータをどこにマッピングするかが決められないからである。このためにどうしてもデータ標準モデルを検討し、作成する必要がある。結果的にはこれによって、ユーザーが期待する検索結果を得やすくなったはずである。また、実際のデータを参照しつつ本モデルを考案したので、日本に所在するおおよその工芸、デザイン作品について対応できるデータモデルとすることができた。

### ・人名データベース

作業を進めるなかで、工芸分野で多い襲名する作家名を同定する必要性が生じたため、典拠とできる作家人名データベースを作成した。作家名を検索すれば、複数の典拠となるソースから記述内容を参照できるようにした。これを照応すれば、その作家についてのより詳細な情報を得ることができる。この実現のために、東京文化財研究所作成の物故者データを提供頂くとともに、展覧会図録掲載

の人名注解、辞典などからデジタル情報化を行った。これに際しては、研究協力者や部外の編集担当者に協力を頂いた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 工図林標準データモデルの作成

まず第一に、工芸、デザイン作品の標準データモデル（分類、記述項目とその形式、付帯情報など）として工図林モデルを定式化した。このデータモデルを作成するにあたっては、まず工芸・デザイン分野で作品、図書について整理を行う際、必要となるデータ項目を想定して案の作成を行い、作品についてモデル案を作成し、他機関所蔵の連携データの項目とのマッピング作業を行い、比較を行った。比較検討の結果を反映して、データ項目の加除を行うとともに、工芸に特有の情報の在り方を包含できるよう、改訂作業を繰り返し、練り上げた。

また、検索する人間の立場から、作品で必要されるデータ項目と図書で必要とされるデータ項目を対応付けることが可能と判断し、作品のデータモデルと図書のデータモデルに対応関係を持たせた。これにより作品と図書をデータベース上で統一的に扱えるようにできたとし、ユーザー・インターフェース上も容易に横断検索を行えることを可能とした。

##### (2) 検索結果の期待値とそれへの対応

上記の標準データモデルを設定することができたので、これを変換用データ・テーブルとした。これを参照することで、各提供機関で異なっているサイズ、形態、技法、年期等のデータ表記の差異を検索画面では標準モデルに合わせて表示させるようにした。このため、データ間の齟齬を見せることなく、提示できるようユーザー・インターフェースを工夫した。これを実現するためには、各項目に表示するデータの読み込みや統合が必要であり、期待する結果をあげるためのデータ加工や整合を取る予備作業が必要であった。

本来は総てのデータを一律に同一書式に改変してしまえば、一挙に解決できる問題なのだが、本研究では各所蔵機関に負担をかけないで、効率的なデータ検索を実現しようと考えたので、この様な手法をとった。だが、将来全国的に本格的なデータベースを構築するとしても、総ての機関に新たにデータ入力を強要することは非現実的と思われるので、本研究で実験した試行が何らかの手がかりとなるはずである。

##### (3) 工芸、デザイン作品記述の問題

本研究を通じて明らかになったもう一つの論点は日本の工芸品が負っている伝統とその流儀が西洋的な美術研究と本質的にかみ合わない部分が多いことを明らかにしたことである。工芸品では重視される幾多の付属品一箱、仕覆、極札などは殆ど作品の一部であり、形態の呼称やジャンル名は技法や概念と結びついている。これらを無理に西洋美術史研究の手法に合わせることで無理がある。つまり、「美術」概念の齟齬は近代日本美術史研究において明らかにされてきたが、作品を扱う手法においても記述や大系について根本的に考え直すべきことがこの研究によって明らかになった。つまり、先に記述方法が決定されるのではなく、必要な研究に相応しい、求められる記述方法、規定が定められてしかるべきなのであるが、現状はまさしくこの逆をたどってきたのである。また、「工芸」は日本では1960年代までデザインから一品製作までを含む領域を指してきたので、この時期までのデザインについても同様の問題が想定される。このことが最大の収穫であり、課題と思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3件)

- ① 森 仁史、「日本の芸と西欧の美術-在来の芸術概念と新来の〈美術〉」、『一寸』、査読無、47号、2011、pp. 62-65
- ② 水谷 長志、「研究文献レビュー MLA 連携-アート・ドキュメンテーションからのアプローチ」、『国立国会図書館カレントアウェアネス』、査読無、308巻、2011、pp. 20-26
- ③ 水谷 長志、「MLA 連携のフィロソフィー-“連続と侵犯”という」、『情報の科学と技術』、査読無、61(6)巻、2011、pp. 213-221

[学会発表] (計 3件)

- ① 森 仁史、「ドキュメンテーションの生成を考える-近代日本の工芸、デザイン資料データベース化を踏まえて」、2013年度アート・ドキュメンテーション学会総会、2013年6月1日、金沢21世紀美術館
- ② 森 仁史、「日本の Kogei」、サンテチェンヌ近代美術館、パリ日本文化会館、2013年3月27、29日
- ③ 森 仁史、「日本工芸の伝統」、清華大学・金沢美術工芸大学合同シンポジウム、2011年9月7日、清華大学(北京)

[図書] (計 1件)

- ① 森 仁史、「シャルロット・ペリアンと日本」研究会編、鹿島出版会、シャルロット・ペリアンと日本（共著）、2011年、P327

〔その他〕

ホームページ等

近代日本工芸デザイン史データベース

<https://kodurin.kanazawa-bidai.ac.jp/>

著作権保護の必要のあるデータが含まれるので、本共同研究の参加者及びデータ提供機関の関係者に限って公開し、2014年3月末までデータベース検索を試験運用している。この期間中に、システムの仕様の改善点・問題点を集約する予定である。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

森 仁史 (MORI HITOSHI)

研究者番号：80552992

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

### (2) 研究分担者

浅野 隆 (ASANO TAKASHI)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：00275083

山崎 剛 (YAMAZAKI TSUYOSHI)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：70210391

伊藤 英高 (ITO HIDETAKA)

東京工科大学・デザイン学部・准教授

研究者番号：20381692

並木 誠士 (NAMIKI SEISHI)

京都工芸繊維大学・工芸学部・教授

研究者番号：50211446

水谷 長志 (MIZUTANI TAKESHI)

東京国立近代美術館・企画情報資料室・主任研究員

主任研究員

研究者番号：50181889